

Newsletter 47

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第47号/2025年11月29日発行

Contents

巻頭言

- 特集Ⅰ 「基盤研究」「読書会」
特集Ⅱ 「情報の教養学」「学習相談」
特集Ⅲ 「庄内セミナー」「日吉学」「エンターテインメントビジネス論」「身体知」
特集Ⅳ 「日吉行事企画委員会（HAPP）企画」
特集Ⅴ 「日吉キャンパス公開講座」「みなさんmiraiプロジェクト」「HRP2025 踊る日吉キャンパス」

活動予定

私の〇〇自慢



第二次世界大戦で爆撃されたイギリス、コヴェントリー大聖堂の今に残る廃墟。この隣に建立された新しい聖堂のためにブリテンの曲は書かれた。

100年、80年、40年——周年に響くレクイエム

教養研究センター副所長
高橋宣也（文学部）
Nobuya Takahashi

今年2025年は「昭和100年」なのだそうです。令和も平成も飛び越えて、レトロに昭和を懐かしむ風潮からすれば、「古き良き昭和」を振り返るのには格好の節目というところでしょうか。しかしその昭和には第二次世界大戦という厄災もあり、今年はその終結80年でもあります。人間が自らにもたらした悲惨から、世界の人々は愚行の所以を学び、困難はあっても、この80年の間に賢明な進路を辿ろうと努めてきたはず。

そこにもう一つ、日航ジャンボ機墜落事故から40年という月日に感慨も浮かびます。ここ100年に大いに躍進した科学技術の負の面として忘れ難い大事故です。当時学生だった私が所属していた大学オーケストラの後輩の親御さんがそこで亡くなりました。戦後日本のオーディオブームを支えた技術者でいらしたといえます。陽の照りつけるなか仲間たちと葬儀に参列したあの日のことは、今も脳裏に焼き付いています。

そうした節目の今年、日本ではいくつかのオーケストラがブリテン作曲の〈戦争レクイエム〉の公演を行いました。第二次世界大戦で破壊された聖堂の再建を記念して書かれた大曲です。この曲では、大戦の犠牲者を通例のラテン語典礼の形式に則って悼みながら、その進行に第一次世界大

戦で戦死した詩人オーエンの英語詩の歌が割って入り、戦場で敵対した者たちが嘆き、死神と戯れ、遂には和解へと向かいます。日陰にある人や子どもの心情に寄り添うことを本領とするブリテンが、筋金入りの平和主義者として敢えて公の場に向けて放った、渾身の音楽モニュメントです。

ブリテンが描く慰藉への道は、ひと筋にはいきません。大砲は、悪を撃つ有効な手段であり、魂から断ち切られるべき禍々しい兵器でもあります。ラテン語の式次第ではアブラハムの子孫はフーガ形式で増殖するのが当たり前なのに、そこにオーエンの詩が邪魔に入って寓話の常道を逆転させてしまい、アブラハムは息子イサクを殺害、それに伴ってヨーロッパの人口は減っていきます。しかしそれでも、個としての人は死にまみえても敵対者と向き合い、当の相手に寄り添い、安息の眠りへと互いをいざなうのです。

この作品にはいまだ現代に通じるアクチュアリティがある、という事実はむしろ不幸なことなのですが、それでもこの戦後80年の折に演奏すること自体が、悲劇を振り返り、死者を記憶し、前進する力を聴き手にもたらししてくれます。

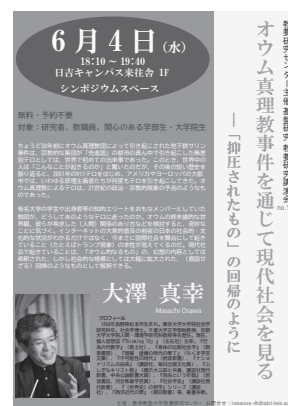
事故による死も、戦禍の犠牲のことも、周年の節目は思いを致す縁となります。記憶はやがては風化し変容するを免れませんが、立ち止まって省みることをやめれば、それは結局は知性を、教養を手放すことにつながるでしょう。芸術作品の体験は、そんな人間性の劣化を阻む真摯な行為となるはずです。〈戦争レクイエム〉を締めくくる曖昧で謎めいた、しかしほのかに暖かい長調の「アーメン」にこもった希望の響きに、私はじっと耳を傾けます。

基盤研究

教養研究講演会 no.11 オウム真理教事件を通じて現代社会を見る—「抑圧されたもの」の回帰のように

教養研究センターは看板通りに教養を研究すべし。教養の中でも大切なのはたとえば宗教。というわけで、ここ何年か、宗教をテーマに講演会を行っています。でも、いわゆる新興宗教についてはまだだったのです。そこで、社会学者の大澤真幸先生をお招きし、6月4日に開催したのが「オウム真理教事件を通じて現代社会を見る—「抑圧されたもの」の回帰のように」でありました。地下鉄サリン事件はちょうど30年前。戦後50年の年でした。東京のど真ん中での毒ガスを用いた無差別テロ。しかもそれを新興宗教団体が起こした。あまりに異常で例外的。でも30年たってそう言えるのか。本講演の問題意識でしょう。そもそも流

行する新興宗教の危機意識のもちょうや極端な行動とは、後から考えれば未来の尖鋭な先取りであることが多いのです。オウム真理教の場合も、2020年代になってみれば、たとえば超大国の行動原理の先取りのように解釈しうる。そうした観点からの縦横無尽な語りに会場は震撼したのでした。(片山杜秀)



文理接続プロジェクト

2025年度の「文理接続研究会」は、昨年度に続き「人工」という共通テーマの下で、2回のゲスト講演と4回のワークショップを行い、年度末に論考集『接続』第4号(2026年4月発行予定)を作成します。

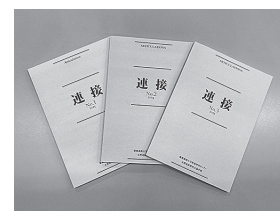
1回目のゲスト講演(5月24日)は富岡薫さん(東京大学特任研究員)による「日本における人工妊娠中絶の歴史と現状：過去、現在、そして未来へ」、2回目のゲスト講演(6月28日)は金子晋丈さん(理工学部)による「ネットワーク：自然と人工のインタラクション」でした。この2回の講演を今年度の出発点として、研究会の参加者(随時募集中)各自が、それぞれの専門分野の視点から、年度末までに「人工」についての考察をまとめます。

7月19日に論考の計画発表、10月4日と12月6日に中間

発表、2月28日に最終発表を行う、文理を跨ぐ異なる分野の研究者たちが、「人工」に係わる様々な主題について自由に議論をし、大いに触発し合います。

研究会の活動については随時ブログで公開しており、2022年度から2024年度までの成果である『接続』第1号、第2号、第3号も閲覧できます(<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/bunri/>)。研究会への参加は基本的に研究者・教員に限定していますが、どなたでも気軽にご参加いただけます。関心のある方はぜひご連絡ください。

(荒金直人)

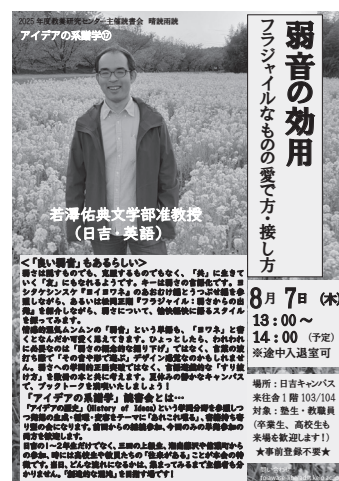


読書会「晴読雨読」アイデアの系譜学

「書籍と発想を持ち寄り」本読書会も、企画実施3年目を迎えました。日吉キャンパスの季節感を意識しつつ、毎回「ちょっと謎めいた、しかし自分も何かを言いたくなる」お題を掲げ、来往舎103/104号室に集っています。25年度の初回は、新生活が始まる春ということで「思考のリズム感覚：論理のスタートダッシュ」(4月30日)と銘打ちました。第2回は『鳥たちのフランス文学』に触発され、「鳥たちの来襲?：歌声・かたち・移動」(5月30日)というお題に。第3回の「熱帯的感受性：ムシムシの彼岸にある言葉たち」(7月16日)では学期末の疲弊感を言語感覚に取り込み、第4回の「弱音の効用：フラジャイルなものの愛で方・接し方」(8月7日)ではヨシタケシンスケの

絵本を扱いました。時に他キャンパス(三田に加えて、信濃町の医学部生も!)からの参加、慶應義塾高校の生徒や先生方の来訪、通信教育課程や卒業生のみなさんのコミットメントによって、毎回創造的な混沌が生まれています。

(若澤佑典)



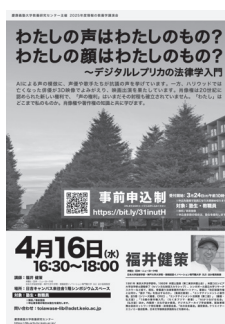
情報の教養学（2025年度春学期）

2025年度春学期の「情報の教養学」では、3件の講演を実施しました。

まず、福井健策氏（弁護士）は、生成AIと権利について講演しました。近年のAIは画像、動画、声などのコンテンツを生成できることをまず述べ、その上で、無断で本物を模倣し公開されている例をとりあげました。このようなコンテンツに対して著作権や肖像権などの権利がどのように適用されるのか、問題はどこにあるのかなどを議論しました。

次に、太田雅文氏（東急総合研究所フェロー）は、公共交通機関に基づいた都市づくり（TOD; Transit-Oriented Development）について講演しました。TODそのものの考え方から始め、東急沿線でどのようにそれを行ってきたのか、「サステナブル」の観点から今後どう考えるべきかなどを議論しました。

最後に、伊藤公平塾長は、慶應義塾で学ぶことに対する考え方について講演しました。まず、1880年代の慶應義塾



とハーバード大学の関係を例に取り上げ、歴史は自分がとるべきスタンスの参考になると述べました。そして、10～20代こそじっくりと考え、知識やいろいろな考え方を身につける時期であり、読む力、書く力の重要性について述べました。

いずれの講演も参加者は興味深く聴講し、質疑も活発でした。2025年度秋学期は3件の講演を実施する予定です。（高田真吾）

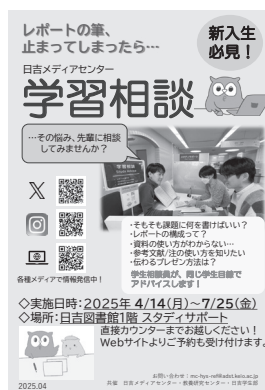
学習相談

今学期も各相談者のニーズに合わせ、様々なアドバイスをしてまいりました。相談の内容は多岐にわたりましたが、多かったものとしては、レポートの書き方や既にできたレポートに対するアドバイス、参考文献の書き方などでした。相談員の間でも引継ぎなどでコミュニケーションをとり、各相談者の疑問や不安を少しでも解消できるように努めてまいりました。

一方で学習相談デスクで待機していると、通りがかった友人に何をしているのか声を掛けられることも多く、学習相談の知名度が低いことを残念に思ったこともありました。

相談者の中にはポスターを見て来てくださった方も多くいたことから、今後はポスターの増設やイベントの開催などの広報に力を入れたいです。そして「学習相談の存在を知っていたら利用したのに」というような方を少しでも減らせるよう励んでいます。

（間瀬春佳・法学部2年）



学習相談員による大学生活スタートダッシュ講座—勉強から課外活動まで—

期待と春の陽が輝く新学期、学生生活や勉強に対する新生入生の不安を和らげることを目的とし、学習相談員によるトークイベントを開催しました。4月3日・4日の両日合わせて47名の参加がありました。

イベント前半では学習相談員の時間割等を紹介し、後半では学部別にグループに分かれての質問タイムを設けました。質問タイムでは、学習に関することはもちろん、サークル等の課外活動の話題も広がり、相談員一同も新鮮な気持ちでアドバイスしました。ある参加者の質問が他の参加者の疑問解消につながる場面も何度かあり、グループでの質問タイムの有効性が見られました。

昨年の反省を踏まえ、日程を履修登録前に設定し、後半の質問タイムを長めに確保することで、時間割の相談や個々の疑問に丁寧に対応できました。次回の企画でも、参加の促進と一人ひとりのニーズに沿ったイベント運営の両立を図ってまいります。

（福吉諒吉・経済学部3年）



第14回「庄内セミナー」報告

2025年度の庄内セミナーは8月29日から9月1日まで無事催行できました。「庄内に学ぶ生命—死と生を繋ぐ」をテーマに、高等学校から大学院まで計19名の参加者は、講師の先生方をはじめ訪問先でお会いした皆様の熱い思いを吸収し、湯殿山で修験体験をし、連日議論しました。今回も温かく迎えて下さった鶴岡の皆様に深く感謝いたします。
(実行委員長・経済学部 鈴木亮子)

生命に向き合える時間

「死と生を繋ぐ『生命』」本セミナーではこの論題について高校生から院生まで様々な世代や学部の異なる塾生が集まり、庄内での体験を通じて得た知識や考えを基に議論を盛んに交し合いました。私たちの班は「死と生は繋がっており分けて考える必要はない」という結論に至りました。しかしながら興味深いことに、私たちはこの数日間同じ物事を見て聞いて学んだはずであるのに異なる様々な見解が議論に上がりました。生命に対して深く討論できる機会はあまり多くない中、その機会を与えていただき様々な考えを持つことのできる仲間と意見を分かち合えた本セミナーは、私の人生において有意義な時間となりました。

(理工学部2年 千田勝晴)

生と死、そして科学と宗教

これまでの生活では、生と死についてじっくり考える余裕がありませんでした。しかし、都会の喧噪を離れ、多種多様な経験を持つ学生たちと、生死とは何か、真剣に議論を重ねるとても貴重な4日間を過ごすことができました。科学、宗教、そして庄内の風土という異なる視点から多様な体験を重ねる中で、日に日に議論が濃厚になっていく変化が面白かったです。また、科学と宗教は相反するものだと考えていましたが、実際には異なる論理を用いながらも、同じ結論にたどり着くことがあるという不思議さを実感し、新しい物の見方を得ることができたと感じています。

(商学部4年 高橋万優子)



思考の材料としての庄内での体験

生と死。考えることも、他人の主張に意見することも憚られるテーマです。しかし、人が皆経験するものであり、そこから逃げずに議論したいという学生と集まったのは私にとって幸せでした。議論では、個々の視点からの意見が出され、語らいが絶えませんでした。時にはセミナーやテーマ設定に対してメタ的な視点から考えることもありました。また、テーマについての思考の材料として様々な体験をするということは初めてでした。修験体験や八朔祭、先端研での活動から、宿で採って食べたタマゴタケに至るまで、生命について深く考えさせられた4日間でした。生と死に五感で触れ、考えの糸口となった庄内の風土、セミナーのプログラムに感謝しています。

(慶應義塾高等学校3年 齋藤遙)

生きることは楽しい

よく食べ、よく学び、よく考え、よく語りあう。生命溢れる庄内の地で、私は生と死と生命について向き合いました。未来永劫生き続ける即身仏、個体としては死ぬが超個体として生き続ける群生林やきのこ、乾眠して生と死を行き来するクマムシ、山伏として修験し生まれ変わる人々。多様な在り方を目の当たりにしました。修験を体験し、生まれ変わった今想うことは、「生きることは楽しい」という素直な気持ちです。複雑な世界のなかで、ただ実直に自分の気持ちと向き合い、楽しく生きること。湯殿の神様方のもとで、私はそのことを学ばせていただきました。

(経済学研究科修士1年 田嶋康汰)



株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座「日吉学」

～探求編 探ってみようその先を～

「日吉」をテーマに、何か疑問を発見して4000字の論文にまとめる——それがこの授業のゴールです。今年も一貫教育校と大学の枠を越え、地学、生物学、考古学、中世史、近現代史、学校史、哲学、文学など多様な専門を持つ9名の教員が共同で担当し、25名の学生と慶應高校生3名が論文執筆に取り組みました。授業の前半は、キャンパス内外のフィールドワークを毎週異なるテーマで行い、久しぶりに授業時間内で日吉台地下壕見学も実施しました。受講者に「教えすぎない」ことを教員で申し合わせ、受講者自身が発見し、探求してもらうことを目指しました。従来は20名に満たない規模でしたが、本年は初めて人数を制限し、熱気と活発な議論のある授業となりました。提出された論文は、昨年から学生の手で編集した冊子としてまとめて蓄積しています。

(都倉武之)



株式会社アカツキ寄附講座「エンターテインメントビジネス論」

2025年度春学期に「エンターテインメントビジネス論」を実施しました。アニメやゲームを始めとしたエンターテインメントビジネスについて、理論と実務の双方から学際的・分野横断的なアプローチを行うもので、2022年度に実験授業を実施した後、2023年度から株式会社アカツキ寄附講座として正式に開始されました。前年度に引き続き2025年度も三原龍太郎（経済学部）がコーディネーターをつとめるとともに、授業は主に非常勤講師の中山淳雄が担当しました。中山や慶應義塾大学教員によるエンターテインメントビジネスに関する講義に加え、アニメ、テーマパーク、映画、芸能、ゲーム、ショートドラマといったエンターテインメントビジネスの各分野で活躍されているゲストスピーカーと中山が対談を行うという形式で進められました。ゲストスピーカーは毎回非常に豪華なメンバーで、出席者と登壇者との間で活発な議論が交わされ、非常に充実した内容となりました。



(三原龍太郎)

最後の「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」を終えて

この2025年度の夏をもって、教養研究センター設置科目「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」は15年（実験授業の期間を入れると20年）の幕を下ろしました。本年度はその歴史にふさわしく「はじまりと終わり」をテーマとする三つの短編小説をテキストに据えました。講師には、この3年間身体知の授業を共に培ってくださったダンサー兼振付家のアオキ裕キ氏のほか、作詞家として活躍するアーティストのエンドケイプ氏、コミュニティダンスのファシリテーターを務める寒川明香氏を迎え、身体・言葉・コミュニティの3つの柱のもとで安心できる環境を構築し、体と言語の可能性を追求する授業を展開しました。最終日の8月16日には成果発表会を開催し、実験授業の頃を含む過去の「身体知」履修者も大勢参加。これまでの授業を振り返るひと時となりました。履修者を通して授業成果がいろいろな場面で花開いていく確信を残して授業は終わりました。20年間この授業に参加して下さった皆様、授業の運営を可能にくださった教養研究センターの皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

(横山千晶)



日吉行事企画委員会（HAPP）企画（春学期）

新入生歓迎舞踏公演：今貂子「彗星」

2025年度新入生歓迎舞踏公演は、京都より、今貂子氏をお招きしました。高校生、新入生を含めて、約250名の観衆がこの公演に立ち合いました。今貂子氏は、その前衛的表現を維持しつつも、教育の現場にふさわしい公演の実施に配慮してくれました。今日、HAPPの当初の理念である「心と頭と体」のバランスが、特に学生や一般人の間でも、大きく崩れつつあります。しかし、〈心—頭—体〉は一体であり、それが相互的ネットワークとして繋がっていなければ、人間の生活は歪み、やがては、社会は大きな困難を背負うことになるでしょう。その意味で、慶應義塾新入生

にとっては、舞踏とその肉体の芸術表現を通して、心と頭と体の有意義なレッスンになったと思います。公演後、小菅隼人×今貂子でポスト・パフォーマンス・トークを行いました。



（小菅隼人）

福澤諭吉と北里柴三郎—近代史上の慶應医学部—

5月10日、来往舎シンポジウムスペースにおいて新入生歓迎行事として講演を担当しました。昨年の紙幣改刷に伴い、新たに千円札に登場した北里柴三郎と、福澤諭吉・慶應義塾が非常に深い関係を有することは余り学生に知られていません。またその縁が結ばれた背景には、近代日本の「官」と「民」のいびつな関係が根ざしています。両者の関係を歴史的に紐解くことで、福澤の学問観や、慶應義塾の歴史が有する強靱さ、そしてそれに触発された北里を原点とする医学部の逞しさを伝えることを目指しました。新入生だけでなく、通信教育課程や地

元日吉在住の方をはじめ多様な多くの方にお集まりいただき、活気ある講演会となったことはうれしいことでした。企画・運営は、経済学部教授津田眞弓さんと、公認学生団体「日本文化研究会」の学生たちが担当してくれました。

（都倉武之）



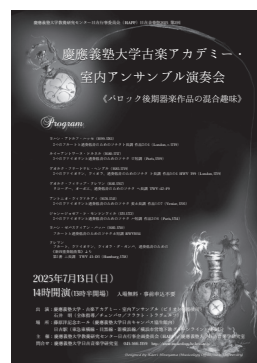
日吉音楽祭2025

日吉音楽祭2025では、7月12、13日に演奏会を開催しました。

第1回は、公募形式の演奏会で、横浜初等部、湘南藤沢中・高等部、慶應義塾高校の一貫校生、学部生および大学院生、名誉教授、そして慶應義塾大学病院の医師の計14名が参加しました。来場者からのアンケートでは「いつもコンサートを開催してくださってありがとうございます。さすが慶應!」、「レベルの高さに圧倒されました。初等部～教授～医師の年齢の差なく人生の音色のすばらしさ!」等の意見をいただきました。

第2回は、教養研究センター設置科目「身体知・音楽（古楽器を通じた歴史的音楽実践）」の成果発表演奏会でした。バロック楽器を用いて、バロック時代の室内楽を披露しました。来場者も多く、概ね好評で終えることができました。

（日吉音楽学研究室 石井 明 平山香織）



ライブラリーコンサート2025

新入生歓迎行事として2016年度から毎年開催しているライブラリーコンサートは、今年で10年目を迎えました。日吉図書館入口のラウンジにて5月14日に弦楽四重奏、地下のAVホールにて5月16日にジャズが演奏され、合わせて約170名がその音色に耳を傾けました。今年は日吉図書館開館40年という節目の年にあたり、建物が時代の変化に馴染み学生が集う場所として多角的に機能していることを改めて実感しました。アンケートには新入生から「近くで聴く生の音は格別」「図書館でこんなに素晴らしい体験が出

来るなんて慶應に入学して本当によかった」など好意的な声が多数寄せられ、この感動体験がその後の学生生活においても図書館を気軽に利用するきっかけとなればとても嬉しく思います。



（日吉メディアセンター 吉沢亜季子）

日吉キャンパス公開講座

2025年度の「日吉キャンパス公開講座」は前身の「横浜市民大学講座」から数え51回目の開催となり、10月4日から11月29日までの日程を組みました。統一テーマに沿った話題について、日吉キャンパスの教員を中心に研究機関としての義塾が持つ知的情報源を広く公開し、塾内外を問わず幅広い年齢層の皆様へ学んでいただくことを目標にしています。昨今の物価上昇に伴い、前年の公開講座最終日に告知し、今年度は受講料の改訂を行いました。そのため、受講者数が減る心配もありましたが、定員を上回る応募をいただき、一部キャンセル等も発生しましたが、ほぼ定員

となりました。統一テーマを「自然と人工」とし、9講師（塾内7名、塾外2名）による各90分の講演、並びに、今年度初めて映画の自主上映（社会問題を題材とした作品）を藤原洋記念ホールで行いました。講演の各分野は芸術・美術、健康、医療、SF、地理、生物、物質材料、社会問題等、特定の分野に偏ることなく多岐に渡るようにしました。各回の講演者やタイトルは下表をご参照ください。また「日吉公開講座」で検索いただきますと、過去の実施分についても記載がございます。

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/exchange/open/>（寺沢和洋）

日吉キャンパス公開講座「自然と人工」

講義日	講 師	テーマ
10月4日（土）	3時限目 内藤 正人	北斎とサイエンス —幕末浮世絵師の事例より—
	4時限目 小熊 祐子	自然と人工で考える、身体活動・運動・スポーツと健康
10月25日（土）	3時限目 新島 進	女性型人造人間が登場するフィクションから女性の人工美を考える
	4時限目 太田 弘	「地球」/「地表」を描く「地図」 —「地図の力」と「地図のレトリック」—
11月8日（土）	3時限目 林 牧子	アオウミウシを育ててみた！ —自然を感じ、観察する—
	4時限目 井奥 洪二	物質・材料と自然・人工
11月15日（土）	3時限目 伊東 英朗	米大陸を放射能汚染から救った菌の抜けた子どもたちの物語
	4時限目 栗原恵美子	資源植物×科学技術が切り拓く、持続可能なゴムの未来
11月29日（土）	3時限目 岡野 栄之	再生医療の現状と未来 —iPS細胞を用いた神経難病への挑戦—
	4時限目	

※公開講座は変更・中止・延期となる可能性があります。

「みなさんmiraiプロジェクト」第3期

2025年度慶應義塾未来先導基金による慶應最大の森がある南三陸町（宮城県）をベースに学ぶプロジェクト。22名の学部・院生が参加。活動内容■6月14日 参加者説明会・講演会：一ノ瀬友博（環境情報学部）「南三陸慶應の森の自然環境と生物相」（主催 福澤育林友の会）■7月1日 合宿事前学習会：糟谷大河・丹羽雄一・植田浩史（全て経済学部）■8月8日～11日（南三陸合宿）■8月18日 合宿後ミーティング■9月29日 活動報告会「キャンパスで、現場へ行くことの意味を考えよう」3期生による活動報告。基調講演：舩木佑介氏（法学部卒。旧南三陸プロジェクトメンバー。NHK政経・国際番組部ディレクター

一）「〈問い〉」

は現場（フィールド）から生まれる」。学生とのトークセッション。

なお、2期

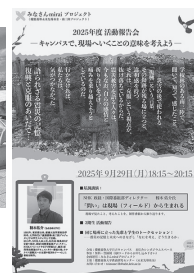
生が考案した杉の間伐材のチャームが義塾の公式グッズとして販売中。

https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/minasa_nmirai/

（津田真弓）



南三陸町震災復興祈念公園
「祈りの丘」



HRP2025 踊る日吉キャンパス

Hiyoshi Research Portfolio (HRP) は慶應義塾大学日吉キャンパス全体で展開されている研究・教育活動を慶應義塾内外に広く紹介することにより、同活動の成果を社会に還元し、社会との更なる交流と連携を図ることを目的としています。4年ぶりに開催されたHRP2025は「踊る日吉キャンパス」と題し、第1部では日吉キャンパスにある4つの研究所・センターを紹介すると共に、「日吉の多様性を繋ぐ上で何が必要か」という視点から語りあいました。第2部ではそれぞれのセンター・研究所の視点から一つの

テーマに取り組み、多様性を実践する実験的ワークショップを行いました。30人ほどの観客でしたが、活発な質疑応答もあり、内容的にはとても充実したものとなりました。

HRPイベントサイト

<https://hrp.hc.keio.ac.jp/event>

（小菅隼人）



【想像力とコミュニティ研究会30】
すげいぞ！シロアリのコミュニティ
9月30日（火）18：30～20：00 カドベヤ

【基盤研究】文理連接プロジェクト第4回 中間発表1
10月4日（土）日吉キャンパス来往舎103・104

古楽アカデミー・オーケストラ・小合唱／ヴェルニゲ
ローデ放送合唱団青年部(ドイツ)との合同・交流演奏会
10月12日（日） 藤原洋記念ホール

【「学び場」プロジェクト】
10月13日（月）～2026年1月23日（金）
日吉図書館1階スタディサポート

【想像力とコミュニティ研究会32】得我(描)く
ワタシとI do meするわたし～命の伝道師を目指す、
新しい自分探しと自己選択の軌跡～
11月4日（火）18：30～20：00 カドベヤ

【読書会】「晴読雨読」第18回：若澤佑典
11月12日（水）17：00～18：00 日吉キャンパス来往舎103/104

【学会・ワークショップ等開催支援】国際シンポジウム：
ウクライナ文化の奥深さと多様性—最前線からの報告
11月19日（水）13：50～18：10
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【学会・ワークショップ等開催支援】日吉キャンパスにえがく夢
—第五校舎跡地から考える持続可能なキャンパスライフ—
12月（予定）日吉キャンパス内

【学会・ワークショップ等開催支援】
慶應義塾大学体育研究所・公社）全国大学体育連合関東
支部共催ワークショップ「ルーブリック活用のための
ワークショップ&ディスカッション」
12月6日（土）日吉キャンパススポーツ棟

教養の一貫教育vol.12 舞踏家・小林嵯峨による
舞踏ワークショップ「こころ」
12月17日（金）15：15～17：30 高等学校日吉協育ホール

【読書会】「晴読雨読」第19回：若澤佑典
12月（予定）日吉キャンパス内

コレgium・ムジクム・オーケストラ演奏会
1月7日（水） 藤原洋記念ホール

古楽アカデミー・オーケストラ・小合唱演奏会
1月10日（土） 藤原洋記念ホール

10月

11月

12月

1月

【日吉キャンパス公開講座】「自然と人工」
1回目：10月4日（土）、2回目：10月25日（土）
3回目：11月8日（土）、4回目：11月15日（土）
5回目：11月29日（土）
13：00～16：15 日吉キャンパスD101教室／藤原洋記念ホール（11/15のみ）

【学会・ワークショップ等開催支援】私の身体と記憶を
紡ぐ—アンナ・バースによる舞踏と即興ワークショップ
10月7日（火） 日吉キャンパス来往舎大会議室

【情報の教養学】第4回：山中祥太「使いやすいユーザ
インタフェースのデザインを理論的に研究する」
10月22日（水）16：30～18：00 日吉キャンパス来往舎大会議室

【想像力とコミュニティ研究会31】
ダンスで世界をつなぐ 東京⇄ベルリン
パフォーマンスプロジェクトチームMIMIZUの挑戦
10月28日（火）18：30～20：00 日吉キャンパス来往舎大会議室

【情報の教養学】第5回：山本龍彦
「AI×アテンション・エコノミーと人間の尊厳
—SNSはあなたを幸福にしていますか？—」
11月5日（水）16：30～18：00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【情報の教養学】第6回：高道慎之介「音のAIを知り人間を知ろう」
12月3日（水）16：30～18：00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】新入生歓迎行事／ジェンダーレスなインプレッションメイク
12月5日（金）16：30～18：30
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【基盤研究】文理連接プロジェクト第5回 中間発表2
12月6日（土） 日吉キャンパス来往舎103・104

【学会・ワークショップ等開催支援】
Analytic Number Theory and Special Functions
12月8日（月）～10日（水） 日吉キャンパス来往舎

【HAPP】新入生歓迎企画／教養の一貫教育Vol.11
「永井荷風文学賞リレー講演会」1
12月12日（金）15：15～17：45 高等学校日吉協育ホール

【基盤研究】文理連接プロジェクト第6回 最終発表
2月28日（土） 日吉キャンパス来往舎103・104

【読書会】「晴読雨読」第20回：若澤佑典
3月（予定）日吉キャンパス内

※活動予定は中止・延期・変更となる可能性があります。

私の「スーパ一銭湯」自慢

私は毎週のようにスーパー銭湯に通っています。最初は気分転換のための、ささやかな習慣にすぎませんでしたが、しかし、気がつけば関東圏のスーパー銭湯はほとんど巡り終えていました。最近では新幹線に乗り、関東周辺の温泉施設へと足を延ばすようになりました。いわば“湯活遠征”です。

学会や研究発表で地方を訪れた際にも、現地のスーパー銭湯に立ち寄ることが少なくありません。東京の施設とは異なる趣や、地元の人々の何気ない会話、湯の肌触り、湯上がりの空気には、その土地ならではの風土がにじみ出ています。日常を少し離れて、世界を別の角度から見つめ直すような、そんな時間がそこにはあります。

私たちが所属する日吉キャンパスの近くには、「綱島源泉 湯けむりの庄」という名湯があります。綱島は昭和初期に温泉街として栄え、「東京の奥座敷」とも呼ばれていました。今ではその面影も薄れましたが、湯けむりの庄に足を踏み入れると、当時の風情がかすかに感じられます。黒湯の天然温泉や炭酸泉、和の趣を感じさせる内装など、館内は癒しに満ちた空間です。

そして湯上がりには、決まってビールと軽いつまみをいただきます。火照った体に冷たい一杯が染みわたるとき、「ああ、また一週間、頑張れそうだな」と感じます。スーパー銭湯は、私にとって癒しであると同時に、ささやかな再出発の場でもあるのです。

(システムデザイン・マネジメント研究科 水門善之)



Newsletter
November, 2025. No.47

慶應義塾大学教養研究センター (Keio Research Center for the Liberal Arts)
発行日：2025年11月29日 代表：片山杜秀
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 TEL: 045-566-1151 Email: lib-arts@adst.keio.ac.jp
<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>